

## 第 42 回(2010. 8.20 配信)

## 雲竹齋先生の歴史文化講座 - 「米」

日本の食料自給率は 40% だという。残りの 60% は外国から輸入している。非常事態が起きて輸入がストップしたらどうなるか目に見えている。中国製の毒入り餃子事件の時は、中国産の野菜など食料品が敬遠されて、人々は一斉に国産品に群がった。その結果物価は跳ね上がった。今では「喉元過ぎればなんとやら」の喩のように、再び安い中国産を求めだした。また、アイルランドのエイヤクィヤトラヨークトル火山がエイヤツとばかりに噴火した際にも、ヨーロッパ各地で航空機が離発着できなくなり、食料品が輸入できなくなった。ちなみに、牛肉の自給率は 10% 前後であり、アメリカでの BSE (牛海綿状脳症 = 狂牛病) 事件で牛肉の輸入がストップして、牛丼が姿を消した時期があったのは記憶に新しい。宮崎県における口蹄疫の流行の結果、多くの子牛を宮崎県に頼っている日本の牛は大変な危機に陥った。不思議なことに、口蹄疫になったプロセスは解明されない。ある人は「絶対に輸入飼料によるものだが、今それを発表したら、アメリカでの BSE 事件や中国製の毒入り餃子事件の時のような混乱を生じ、国際関係に大きな障害を及ぼすからだ」などとまことしやかにいう。口蹄疫の流行は、実は身勝手な人間への動物たちの復讐なのだ。

そのほかにも、麦製品はそのほとんどが輸入に頼っている。日本人の好きなウナギのかば焼きは 80% 以上が輸入品である。日本は 1960 年代から米を除く穀物や大豆などの輸入に力を入れてきた結果であるが、日本の農業は厳しい国際競争にさらされて、米も輸入自由化を求められている。日本には、世界のリーダー的な存在の政治家がいない。そのうちに水道の栓を閉めるように、アメリカや中国はじめ各国が意識的に食料品の日本への輸出をストップしたら、日本人は死ぬか再び戦争するかしかない、と危険なことを口にする者も増えてきたようだ。しかし、農水省は「心配ない」といつている。米の自給率は 100% だから米だけ食べていけばいいというのであろう。つまり早い話が「食べなければいい」というわけだ。住みにくくなってきた。

余談になるが、先日フランスに行ってきた。フランスは農業国である。ヨーロッパ各国からは「百姓の国」としてみられている。「文化の香り高い国」などといって畏敬の念を持ってきているのは日本人のミーちゃんハちゃんだけだ。このフランスの食料自給率がおよそ 130% で、穀物だけでは 200% 近い。平坦な国であるフランスの耕作面積は、山国の日本のおよそ 4 倍もあるからというのも理由の一つだろう。たしかに、パリを一步出れば広大な農地が広がっている。この国の一枚の畑は日本の何十倍もあるが、これを一人の地主が所有している。だから、広大な空港を建設しようと思っても、5、6 人の地主の了解を得ればいとも簡単に出来てしまう。日本の成田は世界の主要国に比べればまったく貧弱だが、それでもまだ土地買収が進まないから完成されない。大きな違いである。戦乱の多かったフランスでは、歴史的に戦争の形態が日本と違うので、民衆が土地の所有にはあまりこだわらないことも理由の一つであるが、かつて日本だって大地主はたくさんいた。戦後、アメリカを主軸とする進駐軍がやってきて、司令官のダグラス・マッカーサー将軍が「大地主はいかん」といって、全部細かくして小作人に分けてしまったから、いまでは大規模農業、機械化農業ができない。したがって米を作るだけでは農家は食っていけない。こういったことも日本の食料生産が低下した原因でもある。戦争に負けると相手国から食料を買わされる羽目になる仕組みがよくわかったであろう。気に入らないことをいえば食料の輸出をストップされてギブアップになる。戦後 65 年たったが、まだ欧米諸国とは対等の関係になっていないことを知ってほしい。そこで教訓。戦争をしたら、絶対に負けてはいけない。

なお、「食糧」とは米や麦など穀物を指す言葉であり、野菜や肉、魚などを含めた場合は「食料」と書くのが一般的である。

日本における米の総生産量は、年間およそ 900 万トンで、正倉院の文書によると、奈良時代の水稲の単収(単位面積当たりの収量)は、10 アール(a)当たり 32 ~ 106 kg だったという。栽培技術も稚拙だった時代だから収量にバラつきが多いのは仕方がないが、江戸時代の文献では 200 kg / a だったという。今では、20 世紀に入って栽培技術や品種改良などによって飛躍的に収量が増え、10a 当たり 500 kg を超える。1965 年までは需要を満たすだけのコメが生産されていなかったが、やがて生産技術の向上により、1966 年ごろから消費量を上回るようになった。これは生産量の増大と消費量の減少という理由によるもので、日本人の肉類などのたんぱく質の摂取量が増えたことにより、米の消費量が減少した結果でもある。政府は 1970 年から水稲栽培面積を減らしてきた。これを「減反政策」と呼び、米を作らない農家に補助金を出してきた。したがって稲作農家は稲を作らなくても金が入ってきたが、かつて 300 万 ha あった水田は、近年は 170 万 ha に減少している。その結果、農村を離れる若者も増え、過疎化が進んだ。また、雑木林が消え里山がなくなり、土地が荒れ、地面の保水効果もなくなって、美しい日本の山河は荒れていった、と嘆く者も多い。

### 時の権力者で変わる(一升枧)

1 人当たり米の年間消費量は、年々減少しているが、およそ 60 kg といわれている。この 60 kg の米を生産するためには水(陸)田がおよそ 120 m<sup>2</sup>(約 36 坪強)必要である。水田の広さを表すにはメートル法よりも歩(ぶ)、畝(せ)、反(段、たん)、町(ちょう)を使っているところが多い。1 歩は 3.3 m<sup>2</sup>(1 坪)で、30 歩が 1 畝、10 畝が 1 反、10 反が 1 町である。米や麦など食糧の収穫量を kg とかトンで表すが、つい先頃までは収穫量は尺貫法を使っていた。長さの単位を「尺」、質量の単位は「貫」を基本の単位としているが、中国の漢の時代(約 2000 年前)にはすでに定められていたようである。大宝律令(701)に登場しているから、日本に伝わったのは 1300 年近く前だったようだが、中国では「貫」ではなく「斤」を単位として使うから、尺貫法というのは日本独自のものである。1 貫は 3.75 kg で貫の 1000 分の 1 が「匁」という単位を使った。また体積の単位は「升」を基本単位としている。1 升はおよそ 1.804 リットルで、1 升の 10 分の 1 が 1 合、1 升の 10 倍が 1 斗、1 斗の 10 倍を 1 石という。1 升の量は、時代によって、また時の権力者の都合などで変化したが、江戸時代になって寛文 9 年(1669)に統一令が出され、江戸と京都に「枧座」を設置して、1 升枧は一辺が 4 寸 9 分(1 寸は 3.03 cm、1 分はその 10 分の 1)、深さ 2 寸 7 分の立方体と定めた。容積にすると 64.827 立方分(1.804 リットル)である。また、米俵については、1 俵が 5 斗という記録が平安時代にはあるが、明治時代には 1 俵は 4 斗と定めた。現在では、容積ではなく重さで 60 kg と決めている。

江戸時代の経済は米中心だったし、武士の俸給は主として米だったから、この俸禄米を一手に扱う「札差」のような金融業者や、一般の米問屋などが、権力者と結託して米相場を動かすなど、問題も多かったようだ。そこから、テレビドラマの時代劇に越後屋など悪徳商人が、「おぬしも悪よ、のう」などといって登場するわけだが、現在も営業している越後屋さんにとっては非常に迷惑な話であろう。あれはテレビ映画だから、などといっても中には頭の弱い人もいるから、越後屋は本当に悪いヤツだと思っている人だっているだろう。しかし、今でも越後屋の中に本当に悪い商人がいたら洒落にもならないが、越後屋さんたちはテレビ局を名誉毀損、商標登録違反など何でもいから訴えるべきだ。

いつ決められたのかは定かではないが、日本人が 1 年に食べる米の量は、およそ玄米にして 60 kg くらいで、おおよそ 1 石(150 kg)あれば一人が養えると想定されて決まったようである。江戸時代においては、武士の俸給は現金支給もあったが、主として主食である米の量で決めており、その支給には 3 通りの方法があった。一つは、「知行取り」といって、大名が幕府から与えられていたように、武士も土地(知行地)を与えられていた方法である。大身旗本に多かったが、そのころ「四公六民」が原則だったから、たとえば 300 石の旗本は、300 石が生産される土地から上がる米の 4 割、つまり 120 石を年貢として得ていた。この場合 300 石を「表高」と呼んでいたから、実質はかなり少なかったのである。ここから食べる分を残して、余りは現金などに替えていた。二つ目は、「蔵

米取り」で、幕府あるいは大名家の蔵から米を現物支給される方法である。これも食べる分を残して、余りは現金などに替えていたが、江戸も末期になると武士の生活も苦しかったから、この米を担保に借金をしていて、蔵米商人ともめ事がたえなかった。中には10年、20年後の蔵米を担保にする者も出てきて、幕府は「徳政令」という、借金をチャラにする政策を取った。現代の法律でいう「自己破産」よりもっとおいしい政令だった。三つ目は現金支給である。特に下級武士などは現金支給が多かった。よく時代劇などに出てくる「サンピン」とは、3両1人扶持の貧乏な武士を侮蔑した言葉で、3両の3(サン)と1人扶持の1(ピン)からきている。なお、1人の扶持は1日米5合の計算で支給されていたから、1年間で1石8斗になる。ちなみに、雲竹斎も小遣い銭が300円/1日だから、気の毒な現代のサンピンなのである